http://hokkaido-poland.com/pole.html

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第40号　1998. 9. 10

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0052
札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社
電話　011-231-8661
FAX　011-221-4936

第三十二回例会
「ポーランド料理を楽しむ会」を終えて

「ポーランド料理を楽しむ会」が七月四日、札幌女性センターで行われました。講師は、熊倉ハリーナさん。この料理会は、毎年恒例となり会員の方々に、好評となっています。参加者二十七名（男性一名含む）新聞広告での、参加者は三名でした。

メニューは、野菜スープ、リヴァゴトヴァナ（ボイル鮭の山わさび添え）。鮭をボイルしたものに、山わさびを沢山のせて食べる料理は、塩分ひかえめでダイエット中の人にも喜ばれそうな一品でした。

会員ではない方は、食事の時にハリーナさんと同じテーブルにつき、いろいろとポーランドのことを質問していただく大変いい機会でした。

同時に、クラコフ日本センターのためのチャリティーバザーも行われました。当日、品物を持ってきて下さった会員もいて料理を作りながらバザーも見てもらいました。完売となり大変うれしいことです。参加者の皆様にお礼申し上げます。

リヴァゴトヴァナ（ボイル鮭の山わさび添え）材料8名分

甘塩鮭切り身（約150g）　8切れ
ローリエの葉　1枚
オールスパイス・塩・こしょう　少々
じゃがいも　16個（1人2個）
いんげん　400g（1人50g）
山わさび　300g
バター　大さじ1
塩　小さじ1
酢　50ml
塩・砂糖　小さじ1/2　/　お湯　少々

作り方

①大なべに水2ℓを入れ、沸騰させる。
②オールスパイス、ローリエの葉を入れる。
③野菜スープで使った野菜の残りを入れる（セロリの葉、　長ねぎの青い部分、玉ねぎ少々）
④香りがでてくるまで、さらに沸騰させる（約5分）
⑤弱火にして、鮭を入れ、沸騰させないようにして、5分ほどゆでる。
⑥皮をむき、適当な大きさに切った山わさびと、塩、砂糖、酢、お湯を一緒にミキサーにかける。
⑦お皿に鮭をとり、茹でたじゃがいもといんげんをつけ合わせ、山わさびのソースを鮭につけていただく。

ポーランド美術散歩（2）

國田祐作

ルネサンス期の建築

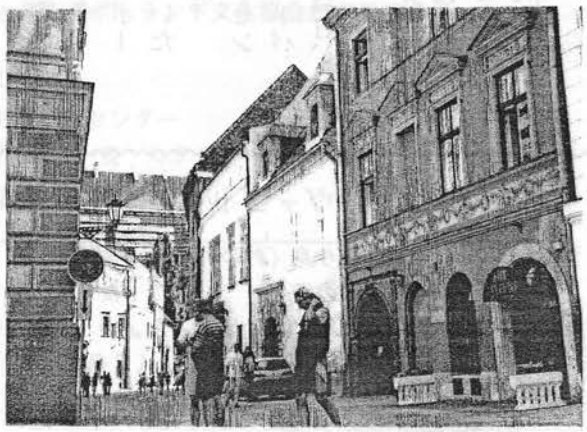
十五世紀イタリアからはじまったルネサンスの波はやがてポーランドにも広まっていきます。クラクフのヤギェオ大学はヨーロッパでも最も古い大学のひとつですが、ここを中心に自由で清新な人文主義の学問・文芸が盛んになりました。美術の面でも十五世紀末から十六世紀にかけて大きく変化しました。

国王ジグムント一世はフィレンツェの建築家フランチェスコを招いてヴァヴェル王宮の改築にあたらせました（一五〇七ー三五年）。重厚なゴチック様式の王宮はイタリア・ルネサンス様式がとり入れられ、中庭を囲む重々しい壁は取り払われて軽快なアーチの連なる三層のロッジア（回廊）に変わりました（図1）。スタイルはたちまちポーランドの各地にひろがって大貴族の居城や都市の中心にあるタウンホール（公会堂）建築の手本となりました。ヴァヴェル宮のジグムント礼拝堂はイタリアのバルトロメオ・ベレッチの傑作といわれ、特徴的な円形ドームや内部装飾、墓室のデザインは礼拝堂の模範とされています。

クラクフ.ヴァヴェル王宮　（図2）

ジグムント一世は妻の死後、再婚の相手にミラノ公スフォルツァ家のボーナ姫を迎えました。新しい王妃はおおぜいの廷臣を従えてクラクフに入り、ヴァヴェル王宮に最新のイタリア文化を傳えました。宮廷にはイタリア、フランドル、フランスから芸術家が招かれ、絵画、彫刻、工芸に大きな影響を与えました。まあ、雇われ外国人というわけですが、居心地がよかったとみえて何十年も住みついた芸術家もたくさんいます。

都市の富裕な商人たちも住居をルネサンス風に改装しました。門には半円アーチの開口部をつくり、正面の壁には幾何学模様の装飾、中庭にはアーチを連ねた回廊を設けるなど、大貴族に負けないルネサンス趣味を誇ったのでした。クラクフの旧市内カノニチャ通り（図2）にはいまでもその住居が修復保存されています。修復の途中でルネサンス当時の壁画や天井装飾が見つかり話題を呼びました。ワルシャワの旧市内マーケット広場にもルネサンス様式の商人の住居が昔のまま再建されています。クラクフのマーケット広場のクロスホール（織物会館）はいまはおみやげショップになっていますが、外側の壁の上部にほどこされた曲線の装飾手すりはルネサンス・デザインをそのまま残しています。



クラクフ.カノニチャ通り　（図2）

ザモシチのタウンホールやサンドミエシの大貴族の居城など、ルネサンスの面影を伝える建築を訪ねてみるのは楽しい旅です。クラクフ郊外のニエポオミツエの森はジグムント・アウグスト王の狩猟地だったところでルネサンス様式の別荘が保存されています。森の中にはいまでは数少ないヨーロッパ・バイソンの飼育場があってバイソン好きの私にはうれしい旅でした。

ポーランド・ルネサンスは文芸・美術の花を咲かせ、自然科学ではコペルニクスのような偉大な学者を生んだように、まさに黄金の世紀でした。

（続く）

（北海学園大教授）

一八四〇年のショパンと時代精神（2）

三浦　洋

ルーマニアとショパン

さて、チャルトリスキのバルカン政策は、ルーマニアにも関わりました。

「ランベール館のバルカン政策」の著者スコブロネクによれば、当時のバルカン半島の人口は千二百～千四百万人ほどで、最多数を占めるスラブ人が五百五十万人、次に多いのがルーマニア人で三百万人だったということです。ですから、チャルトリスキが計画通り、バルカン半島のスラブ人を自立させるためには、ルーマニア人の協力が欠かせませんでした。また、ルーマニア人の方もハプスブルク帝国やトルコの支配に反対して戦っていましたので、同じような境遇にあるポーランド人に共感し、一八三〇年代から共同運動を模索していました。パリのチャルトリスキとルーマニア人の代表が正式に協力関係を結んだのは、一八三七年です。

こういう経緯からすると、ショパンが一八四一年、最高傑作の「ファンタジー」をルーマニアの王女カトリーヌ・ド・スッゾに献呈したことにも関係がありそうに見えます。背後にチャルトリスキの意向が推測されるからです。実際、スコブロネクは別の著書「バルカン諸民族の同盟者」で、ショパンがカトリーヌにピアノを教え、作品を献呈したことを重視し、「ショパンは、ポーランドとルーマニアの関係の緊密化に貢献した」と評価しています。これは、いかにも歴史家らしい見方です。

しかし、私は必ずしも、スコブロネクの政治的な見方に賛成できません。というのは、ショパンがカトリーヌに献呈したのには、個人的な理由があったと思われるからです。カトリーヌは、オブレスコフというロシアの公爵の娘で、母親のオブレスコフ夫人は、ショパンの母親ユスティーナと親しくしていました。夫人はフランスとロシアをしばしば往復し、そのついでに、ショパンとユスティーナの互いの伝言の仲介者になりました。それで、ショパンは大きな感謝を込めて、娘のカトリーヌに「ファンタジー」を献呈したのだと思われます。その後もオブレスコフ夫人はショパンに尽くし、晩年の困窮したショパンの家賃の半分を彼女が払いました。（残り半分は、スコットランド人の弟子、ジェーン・スターリングが払いました）。

さて、話をルーマニアに戻しましょう。チャルトリスキと結んだルーマニア人の代表は、一八三九年にワラキアに帰国しましたが、逮捕・投獄されたため、結局、計画は頓挫しました。同じ年、先に述べたトルコ・エジプト戦争が起こったので、チャルトリスキの当面の目的は、バルカン半島のスラブ人が弾圧されないよう、民族の自由を守ることに変わりました。そこで、自治の精神を謳う「五月三日憲法」の運動を展開することになりました。「五月三日憲法」はフランス革命の精神を受け継ぎ、「自由・安全・繁栄」をモットーにした憲法だったので、民族弾圧に反対する拠り所となったのです。（もっと最近では、「連帯」主導の「五月三日憲法」は運動は、社会主義支配に反対する運動でした）。

ポーランド語講習会のお知らせ

前回に引き続き、日常会話・基礎文法の入門・初級コースの復習を行い、さらに発展させます。　その他文化や情報などポーランドを知る内容です。しばらく中断されていた方々も、楽しいリフレッシュのためにおいで下さい。

【日時】10月7日から、毎週水曜日 午後6時 ～8時
11月25日まで（全8回）
【場所】北海道クリスチャンセンター
札幌市北区北7西6（電話736-3388）
【講師】熊倉ハリーナ先生・高岡美保先生
【会費と申し込み】
12,000円（10回分）初回会場にて申し受け
【お問い合わせ】
富山まで（電話551-7698）

「五月三日憲法」運動の高まり

一八四〇年から四一年にかけてが、パリにおける「五月三日憲法」運動の最盛期でした。チャルトリスキは、パリの反体制雑誌「両世界評論」に意見広告を載せ、バルカン半島のスラブ人を守るため、フランス政府が政治的に参加する（約百年後にサルトルが流行らせた「アンガージュ」という言葉が使われている）よう訴えました。

同時にチャルトリスキは、スラブ民族の独自性を主張するには、スラブの文学や文化を宣伝する必要があると考え、パリのコレージュ・ド・フランス（市民公開講座の方式で講義を行う大学）の教授に、ポーランドの詩人、アダム・ミツキェヴィチを就任させるべく働きかけました。計画は成功し、ミツキェヴィチは一八四〇年十二月から四年間、「スラブ文学史」の講義を行いました。講義は十二月に始まって、翌年の五、六月に終わるシリーズで、これが四回行われたわけです。

ミツキェヴィチの講義は、「五月三日憲法」運動と同時に進められ、一八四〇年から発行された「五月三日」という機関誌に講義の抄録が掲載されました。

もうおわかりになるでしょう。ガシンスキに宛てたショパンの一八四〇年五月三日の手紙は、このような「五月三日憲法」運動の高まりの中で書かれたのです。これで②の疑問が解けました。

ガシンスキへの手紙の中で、ミツキェヴィチの作品「コンラート・ヴァーレンロット」のことが書かれているのも、この時期の亡命ポーランド人の雰囲気を反映しています。この作品はパリで有名だったらしく、リストが一八四一年のショパンのコンサート評を書いたときに、引き合いに出しているほどです。また、二十世紀になってからは、この「コンラート・ヴァーレンロット」がショパンのバラード第1番にインスピレーションを与えたという俗説が、ピアニストのコルトーやショパン研究者のブールニケルらによって流されました。この説には根拠がないことは、既に「ポーレ」第31号（一九九五年発行）で書きましたので繰り返しませんが、見方を変えると、コルトーらフランス人が今だにミツキェヴィチを意識しているのは、チャルトリスキの文化宣伝戦略が成功した証拠なのかもしれません。

ミツキェヴィチのバラードがショパンのバラードに影響を与えたという説を、ポーランド人ではなくフランス人が強調するのは、少し滑稽でさえあります。しかし、フランス人が、ショパンだけでなくミツキェヴィチの名前も記憶したのは、嬉しいことです。今もランベール館（ロスチャイルド家の所有で、非公開）の近くには、ミツキェヴィチ記念館（傑作「バン・タデウシ」の自筆原稿がある）とポーランド図書館があります。

ドラクロワが描いたミツキェヴィチ

そのミツキェヴィチの講義は、「スラブ文学史」と銘打ってはいましたが、実質的には政治演説でした。ポーランドを支配するロシアの野蛮さを告発する内容だったのです。その背景には、ポーランドのカトリックとロシア正教との宗教的対立もありました。それを後に知ったロシアの思想家ゲルツェンは、「ミツキェヴィチの講義は、プーシキン（ロシアの詩人）とミツキェヴィチの間の意見の違いを示した。ポーランド人とロシア人が互いに理解し合う時期はまだきていなかったのだ」（「ロシアにおける革命思想の発展について」）と、淋しそうに書いています。

一方、ショパンとサンドは講義の熱心な受講者で、四年とも通いました。二人が十二月から五月の間はノアンに行かず、パリにいたのは、ミツキェヴィチの講義を聴くという目的もあったからでしょう。やがて一八四五年三月になって、ショパンは詩人のステファン・ヴィトフィツキ宛ての手紙で「もう今年は、ミツキェヴィチは講義をしません」と知らせています。

民族的オペラへの期待

実は、ミツキェヴィチがコレージュ・ド・フランス教授に就任する過程では、サンドも役割を果たしました。就任する前年の一八三九年十二月、サンドは、ゲーテとバイロンとミツキェヴィチを並べて論じるエッセーを、「両世界評論」誌に書きました。ドイツのゲーテといえば最高の文学者で、イギリスのバイロンといえばロマン派詩人の崇拝の的でした。彼らとミツキェヴィチを並

べて評価するということは、ミツキェヴィチが第一級の詩人であると知らしめることにほかなりません。このようなサンドの行動はチャルトリスキの文化戦略を支援するものにちがいありません。

「バイロン以外は本だと思わなかった」と公言するミツキェヴィチですから、サンドの評価を嬉しく思ったことでしょう。後々まで、ミツキェヴィチがサンドの肩を持ったのは、こんな経緯があるからです。ミツキェヴィチが、「ショパンはサンドの足手まといになる」と言って二人の結婚に反対したのは、ショパンを嫌っていたからではなく、文学者・政治活動家のサンドを尊敬していたからです。ロシアのドストエフスキーやトルストイがサンドを激賞したのも、きっと同じような感覚からでしょう。

その頃、サンドは、ミツキェヴィチの作品「父祖の祭り」のフランス語訳も進めていました。この作品にはミツキェヴィチの演劇観が最もよく現れていると言われ、おそらく、サンドのフランス語訳には、オペラ化の期待が込められていたと思われます。もちろん、オペラを作るよう期待されていたのはショパンです。それまでにも、ショパンには、「ポーランドの民族的オペラを作ってほしい」という声が寄せられていました。とくに、ショパンの師であるユゼフ・エルスナーは、熱心で、「いつか、君の民族的オペラが見たいものだ」とポーランドからの手紙に再三書いていました。チャルトリスキの文化戦略からしても、ミツキェヴィチの作品によるショパンのオペラができることは、願ってもないことだったでしょう。パリの上流階級の人々にポーランドの存在を訴えるにはオペラはうってつけだからです。

すでに現代の私たちは、民族的オペラをいくつか知っています。例えば、ロシアの詩人プーシキンの「ボリス・ゴドノフ」をムソルグスキーがオペラにしたのは有名です。かつて、ソ連時代の映画監督アンドレイ・タルコフスキーは、亡命したイタリアで「ポリス・ゴドノフ」を演出したことがあります（指揮は、クラウディオ・アバドでした）。では、ポーランドで、プーシキンとムソルグスキーに当たるのは誰かと言えば、もちろんミツキェヴィチとショパンでしょう。ミツキェヴィチの「父祖の祭り」は民族の歴史劇であり、その点で「ポリス・ゴドノフ」とも似ています（ミツキェヴィチは、三年目の講義で「ポリス・ゴドノフ」についても論じました）。実際、「父祖の祭り」の芝居は、二十世紀になってから、カジミェシ・ディメク（この人は、今年のミツキェヴィチ・イヤーの参画者の一人）の演出によって、ポーランドの政治運動に使われたことがあります。一九六八年一～三月の学生運動ですが、ロシアへの反抗の感情を煽る劇だとして、弾圧されました。ですから、ショパンがオペラ化していたならば、十九世紀にも使えた可能性があるわけです。

しかし、ショパンはオペラを作りませんでした。サンドが「父祖の祭り」を訳していた一八三九年は、私の考えでは、ショパンの音楽の後期が始まる年です。一八三九年作のソナタ第2番、一八四〇年作のポロネーズ第5番嬰ヘ短調、一九四一年作のファンタジーと、各年の代表作を書けばわかるように、この頃のショパンの音楽は深刻・深遠・思索的で、最も抽象的な楽想に達していました。それは、聴衆を陶酔させるオペラとは正反対の世界です。オペラが必要とする外見的な効果とは対極の世界に、ショパンの音楽がたどりついていたわけです。

確かにショパンがオペラを作らなかったのは残念ですが、そのかわり、後期のショパンの作品は、現代音楽の作曲家が望みながら達し得なかった世界を実現しています。あの深い沈黙の世界です。後期ショパンの美しい音楽の背後には、深い沈黙が満ちています。ウェベルンが求め、武満徹が理想とし、ノーノが12級に分けて表現しようとした深い沈黙は、既にショパンの調性音楽の中で実現されていたというのが私の考えです。ウィーンのシュテファン教会の地下で、マジョルカ島の修道院で、夜のノアンの闇の中で、折にふれショパンが「聴いた」沈黙が、後期の作品にはみちています。私には、オペラよりも、そんな作品がショパン的だと思えます。

（つづく）

サンドの息子モーリスと娘ソランジュ
（かつての夫デュドゥヴァンとの間の子供）

第33回例会のご案内

ビデオによる映画鑑賞会

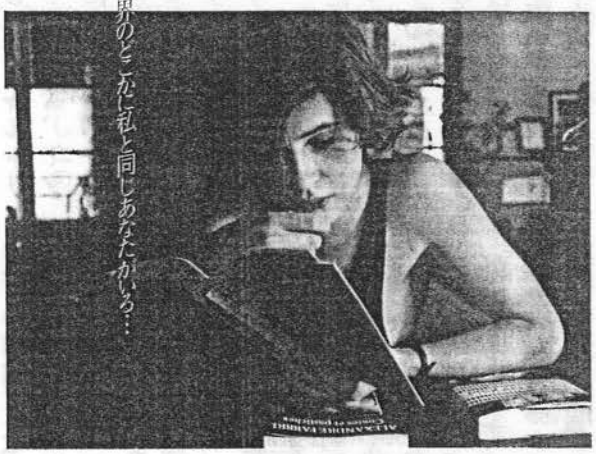
la DOUBLE VIE de véronique

ふたりのベロニカ

㊗91年カンヌ国際映画祭

主演女優賞受賞（イレーヌ・ジャコブ）国際批評家協会賞受賞
91 年全米批評家協会賞 / 外国語映画賞受賞
91 年 LA 批評家協会賞 / 音楽賞受賞

一人二役を演じたイレーヌ・ジャコブが
カンヌ映画祭で主演女優賞を受賞した
この作品は、「愛に関する短いフィルム」で
注目される鬼才キェシロフスキが監督した



【日時】　9月27日（日）
午後1時～4時
【場所】　札幌市女性センターLL研修室
中央区大通り西19丁目　地下鉄東西線西18丁目駅下車
（電話）621―5177
【上映映画】　ふたりのベロニカ
【お話】　本間富雄さん
映画を観賞後、ポーランド映画についてお話をしていただきます。

今回も日本センターへの寄附のためのバザーを開きます。
たくさんの方の参加をお待ちしています。

総会と例会のお知らせ

十月十七日はショパンの命日にあたります。これに合わせて三浦洋さんのお話と音楽「ショパンについて」の第三回目（最終回）行うことになりました。皆様おさそい合わせの上、多数ご参加下さい。

なお、同じホテルで引き続き、総会と懇親会を行うことになりました。追って詳しい内容をお知らせする予定です。また、総会・懇親会の出欠のお問い合わせも行います。

例会

【日時】十月十七日（土）
午後三時三十分より
【場所】すみれホテル　4Fコスモス
中央区北一条西二丁目
（電話）261－5151
【講師】三浦　洋さん
【お話】「ショパンについて」（最終回）

総会

【日時】十月十七日（土）
夜六時より。引き続いて懇親会
【場所】すみれホテル　4Fすずらん
（住所・電話番号は右と同じ）

クラコフ日本センターへの寄附について

ポーレ３９号でお知らせしましたように、日本センターへの寄附のためのバザーを下記のように実施しましたのでご報告いたします。

第１回　6月6日　市民会館

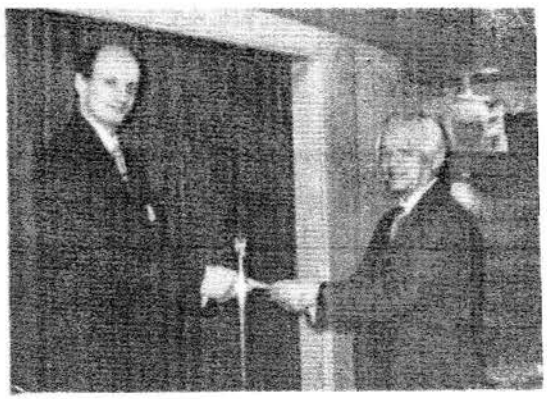
収益	53,200円
その他の寄附	13,080円
合計	66,280円

第２回　7月4日　料理教室

収益	19,300円
その他の寄附	10,000円
合計	29,300円

寄附協力者

安藤むつみ・石倉京子・小笠原正明・河合楽器・キュロン・クルーン・國田祐作・熊倉ハリーナ・米光幸子・小林暁子・斎田道子・佐々木保子・佐藤恭子・富山信夫・灰谷慶三・松井真知子・宮浦まゆみ・安田誠子・吉田邦子・渡辺卓・渡辺洋子・ポーランド旅行の懇親会参加者



第１回の収益金は６月18日マリア・ポミャノフスカさん（ポーランド大使夫人）のコンサート後のレセプションの席で、谷本一之会長からポーランド大使に直接寄託されました。

クラコフの日本センターと交流をしましょう！

センター長からの手紙

CENTRUM SZTUKI I TECHNIKI JAPOŃSKIEJ
CENTRE OF JAPANESE ART & TECHNOLOGY
manggha
MUZEUM NARODOWE W KRAKOWIE
NATIONAL MUSEUM IN CRACOW

Cracow, June 4th, 1998

親愛なる國田様：

1998年3月28日付けの手紙と年賀状をいただき，とてもうれしく思いました。本当にありがとうございました。ご返事が遅れて申し訳ありません。しばらく入院しておりまして仕事から離れておりましたが，今はもうセンターに戻っています。

1987年 に札幌で設立された 北海道ポーランド文化協会についてのお知らせをいただけることは，私にとってたいへん嬉しいことです。おめでとうございます！何千キロも離れたところで，人々がポーランドとポーランド文化についての知識を高めることに意義を感じておられるということは，素晴らしいことだと思います。どうか私の心からの感謝をお受け下さい。

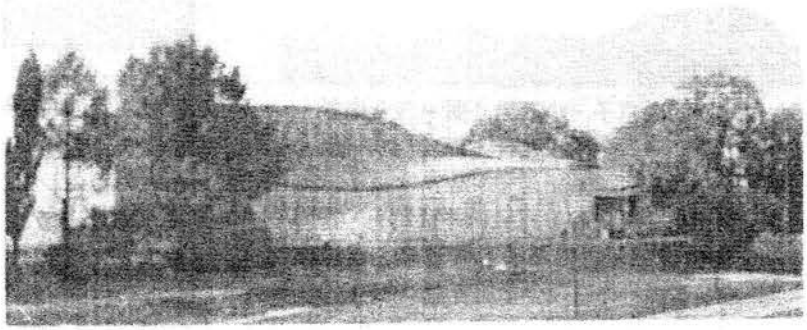
「まんが」センター（クラコフ日本美術工芸センター）および貴協会の両方の行事についての情報を，互いに交換できれば素晴らしいと思います。これより，あなたを私どものメーリングリストに加えさせていただきます。

明日，私たちは日本の芸術家 Kiyokatu Matsumiya の展示会をオープンすることになっています。また7月3日には Takuya Tsykahara の写真展を開催することになっています。ごく近い将来，日本の民族舞踊の公演に加えて，二つのピアノ演奏会，生け花とお茶のショー，琴の演奏会を計画しています。去る 5月には，京都の伝統工芸の展示会を催しましたし，（完成の第一段階に達した）「まんが」センターの日本庭園のオープニングセレモニーを行いました。日本庭園の公開も展示会も，クラコフで開催された第 6回世界の歴史的都市会議に合わせて，京都の市長が臨席して行われたものです。

親愛なる國田様，もう一度あなたに対しましてお礼を申し上げますとともに，日本の皆様にポーランド文化に親しんでもらうため，あなたと北海道ポーランド文化協会が実りある活動を展開されますことをご期待申し上げます。

「まんが」センター
センター長　カタルチーナ・ブリコビツ

「ポーレ」編集委員会
小笠原正明・斎田道子
佐々木保子・安田誠子
（連絡先）621・1783
（斎田）



POLE 第 40 号（1998.9.10）目次

〈第 32 回例会〉「ポーランド料理を楽しむ会」（1998.7.4）を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
國田祐作「ポーランド美術散歩（2）ルネサンス期の建築」・・・ 2
三浦洋「1840 年のショパンと時代精神（2）」、第 26 期ポーランド語講習会（1998.10.7～11.25）のお知らせ・・ 3
〈第 33 回例会〉ビデオによる映画鑑賞会「ふたりのベロニカ」（お話：本間富雄、1998.9.27）のお知らせ・・・ 6
第 12 回総会と〈第 34 回例会〉「ショパンについて（最終回）」（お話：三浦洋、1998.10.17）のお知らせ、クラクフ・日本センターへの寄付について・・ 7
クラコフの日本センターと交流をしましょう!～クラクフ・日本センター長からの手紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8